

ニコス・カザンツァキス

## 『わが旅——日本一九三五年』

山川 偉 也 訳

訳者によるまえがき

ここに訳出したのは、ニコス・カザンツァキスの日本・中国旅行の書、NIKOS KAZANTZAKIS, TAEIAYONTAS-IAIONIA-KINA, EKTH EKΔOΣH, AΘHNA, 1969の翻訳である。今回掲載されるのは、そのうち“IAIONIA”篇三分の一強に相当する部分である。

訳者がカザンツァキスのこの旅行書の訳出にとりかかったのはもう何年も前のことであるが、一応の訳出を終えても、なおかつこれの公刊をためらわせる事情があった。それは、カザンツァキスが頻繁に引用する日本の詩歌・歌謡（和歌・俳句・都々逸・民謡等々）の類の出典を詳らかにすることができないことであった。そして、その事情は現在にいたるも変わっていない。しかし、思いかえしてみた。それらの出典は、果してすべて明らかにすることができるものなのであろうか、と。カザンツァキスの引用には出所が注記されていない。そのギリシア語は、おそらく、自身がすぐれた詩人であった著者の手になる、英・仏語訳からの重訳であろう（—あるいはまた、創作ですらが入っているかもしれない—）。しかし、その英・仏語訳は誰の手になるもので、どういう経路を経てカザンツァキスの眼にとまることになったのか。これは、もはや解くことのできない問題であるのかもしれない、と。そ

れにまた、カザンツァキスのギリシア語訳日本の詩歌・歌謡を元の姿に帰することを考えてみると、これもまた、問題なしとはしないことが分かる。カザンツァキスが知っていた日本の詩歌・歌謡の類は、所詮は欧米語訳のフィルターを通したもので、それをギリシア語訳したものを元の姿に帰すことに、果してどれほどの意義があるのか。たとえよし、元の姿に帰すことが可能だったとしても、場合によっては、元の姿に帰されたものを嵌入された文脈は、翻訳文化ギャップ特有の異和効果を発揮し、著者が本来意図したものとは異なる別のメッセージを送信するものとなるかもしれないのである。

こうしたいろいろな考慮の末、ひとまずここで、長い間のわたしの懸案事項であったカザンツァキスの日本旅行記翻訳を、試訳のかたちで公開してみようという気持ちになった。ひとりの世界的な作家が見た一九三五年の日本の断面をとおして、ありし日のわが国の姿を振り返ってみることに、それなりの意義はあるだろうと思ったからである。

今回掲載することのできなかった残り三分の二については、次の発表の機会をまちたいと思う。なお、末尾に著者カザンツァキスの簡単なバイオグラフィを付しておく。

## わが旅—日本一九三五年

### 目次

はじめに	
日本船の上にて	
東洋の港	
コロンボ	
シンガポール	(以上本号)
日本人クリスチャン	(以下次号予定)
上海——呪われた都市	
船上最後の日々	
サクラと大砲	

### はじめに

かつて知ったひとつの国を、見、聞き、嗅ぎ、触れようと眼を閉じるとき、わたしは、自分の胸におののきが走り、喜びではちきれそうになるのを感じる。

あるとき、あるラビに、次のような質問をしたものがある。

「ユダヤ人たるものはすべてパレスチナに帰るべきだ、とあなたは仰る。それであなたが考えていらっしゃるの

は、さぞかし、天の、非物質的、精神的な意味のパレスチナ、つまり、わたしたちの真の故国のことでございましょうな？」

ラビは憤激し、手にした杖を大地に突き立て、叫んだ。

「否！ わが望むパレスチナは地上のそれ、君のその手で直かに触られる、岩と茨と泥土からなるそれだ！」、と。

同様に、わたしの養いの糧であるのも、非物質的で抽象的な記憶などでは断じてない。たとえわが精神を、鬱然たる肉の喜びと苦しみから浄化し、透明このうえない思想に純化できたとしても、わたしは、飢餓のあまり死んでしまうことだろう。ひとつの国を現前させ、いまひとたびの喜びを味わおうと眼を閉じるとき、わたしは、自分の五感、自分の体全体に根を張る貪婪な五つの触角で、これに触れ、自分のほうに手繰りよせるのだ。さまざまな色、果実、女。果樹園、狭苦しく猥雑な小路、腋の下の匂い。青く乱反射する果てしない雪。焦熱の太陽の下にチラチラ舞いあがる砂、波打つ砂漠。哀号と叫びと歌声。はるか彼方から聞こえてくるラバ、ラクダ、トロイカの鈴の音。あの、モンゴルの町々のむかつく悪臭が、消え去ることはまたとあるまい。それは、わたしの鼻孔にこびりついて離れない臭いなのだ。わたしはまた、わが手に、永遠に――つまりはわたしの手が腐り果てるまで――、ブカラのメロン、ヴォルガの西瓜、ひんやりと優美な日本の少女の手・・・を握りしめつづけることだろう。

一時期、まだ若いころ、わたしは、自分の飢えた魂を抽象的な概念で養おうとしたことがある。身体は奴隷、その義務は、生の素材をかき集め、これを花咲かせ観念として結実させるべく、精神の果樹園にもたらずにある、と考えた。自分のなかに濾過され形成されていく世界が、肉も、臭も、音もないものに昇華されていけばいくほど、わたしは自分が人間的努力の頂点を極めつつあると感じたものだ。そして喜んだ。模範として愛し崇めた仏陀がわ

たしの最大の神であった。汝の五感を滅却せよ。汝のはらわたを空っぽにせよ。何物も愛するな。何物も憎むな。何物も欲するな。何物も望むな。息を止めよ、すれば世界は消え去るであろう。

しかしある夜、わたしはひとつの夢を見た。飢餓というか、渇きというか、世界に倦み疲れることを知らない野蛮な一族の痕跡が、ひそかに、わたしの内部でうごめきつづけていた。わが精神は、倦み疲れたふりをしていたのだ。君にはそれが、万事を悟り澄まし飽き飽きして、わが百姓魂の発する悲痛な叫びを、皮肉な笑みを浮かべつつ見下ろしている、と感じられた。だが、わたしのはらわたには—神よ、讃えられよ！—血と泥と鬱渤たる欲望が渦巻いていたのだ。で、ある夜、わたしはひとつの夢を見た。顔のない唇—大きな三日月型をした女の唇、を見た。それは動いた。「汝の神、そは何ぞ」と尋ねる声を聞いた。ためらいなくわたしは、「仏陀です」、と答えた。するとふたたび唇が動き、言った、「否、エパフォス」、と。

ガバとわたしは、眠りから跳ね起きた。突如として大きな喜び、確かさが、心に溢れるのを実感した。騒然たる誘惑にさらされての覚醒大悟なるもののなかでみつけれなかったものを、わたしはいまや、夜の、太古の、母なる抱擁のうちに、発見するにいたったのだ。その夜以来、わたしは迷わなかった。みずからの道を行き、所詮は自分や自分の民族には無縁な、肉をもたぬ神々の崇拜のため失われた青春の日々を、取り返そうと努めた。抽象的な概念を肉に変え、これを養分とするにいたった。エパフォス、つまり接触の神こそがわが神だということを、わたしは悟るにいたったのだ。

そのとき以来、わたしはすべての国を、触覚を頼りに知ってきた。自分の記憶が頭でなく指先、皮膚のいたるところで鳴り響くのを、わたしは感じる。こうして、日本のことをわが精神に呼び来らせようとするとき、わたしの指は、まるで愛しい女人の胸に触れようとでもするように、震えるのである。

ムハメドが忠実な信者シェイクの家を訪れ、扉を叩いた。戦いについて相談するつもりだった。友人の妻ゼイネプが、扉を開けようと玄関に走った。だが、彼女が扉を開けたちょうどそのとき、一陣の風が吹きわたった。ゼイネプのまとった衣服にさざ波が立った。胸が露わとなった。

ムハメドは目の眩むのを感じた。そして、いままで自分が愛した他のあらゆる女たちのことを、たちまちのうちに忘れ去った。彼は手を挙げ、神に感謝を捧げた。「わが心をかくも移り氣に造りたまいしアラー、主よあなたに感謝します」と。

極東の国に連れていってくれる日本の蒸気船に乗りこんだとき、わたし自身が、まさにこの同じ感謝の祈りを、ポートサイドで捧げたのである。すなわちわたしは、以前に愛した一切の国々、地理学上の――合法的・非合法的な――恋愛沙汰の一切をたちまちのうちに忘れ去り、全身全霊を、新たな愛の冒険のほうへ、神秘的というしかない動かぬ微笑を湛えつつ蒙古風の流し目をこちらに送ってくる、あの遙かな国のほうへと振り向けたのであった。

では、われらもまた、われらが心を

かくも移り氣に造りたまいしアラーに

感謝の祈りを捧げよう。そして

日本の胸をかいま見させてくれる

一陣の新たな風を吹きわたらせよう！

一九三八年 春

## サクラとココロ

日本へ旅立つとき、わたしは、「サクラ」と「ココロ」という二つの日本語を知っていたにすぎない。単純きわるこれら二つの言葉を知っているだけで、充分うまくやっていけるだろう……。自分なりにわたしは、そう考えたのだった。

最近になって日本はキモノを脱ぎ捨て、桜の背後の大砲と剣を顕すにいたった。が、それ以前の日本は、艶めく赤い木のサンダル、黄色い菊の花をあしらった着物、豊かに結いあげた緑なす黒髪、象牙の櫛、そしてセンチメンタルな

春ごとに おのが姿を 水の上に

映す桜は いとしやな

手折らむと 手折らむと やれ、しょうがいな

刺繍せるわが袖の辺を 濡らすのみ

といった歌を散らした絹の扇ともども、わたしたちの想像力のなかで明滅する日本であった。

日本についてのわたしたちのイメージ、その背景にはいつも、万年雪を戴く富士山が聳え立ち、サミセン（素朴な三弦のリユート）が、抑制されとだえがちの、溜め息のような悲しい撥の響きを静かに奏でていた。風景、着物、女、音楽、そして黄昏—これらのすべてがわたしたちのなかで混じりあい合体して、日本のもつきまじめさと優美

さを、ひとつの調和あるものに仕立てあげていたのである。

日本は諸民族の「ゲイシャ」であった。遙かな水上にあって彼女は、悦楽と神秘に満ちた微笑をわたしたちに送りつづけた。マルコ・ポーロは彼女を「ジパング」と命名し、これを美しく、快樂的なひとびとの住む国、黄金の国として描き、わたしたちのありとある想像力をかきたてることになった。コロンブスもこれに煽られたひとりだった。彼はジパングを求め、そのために仕立てた三艘の帆船で出発し、大西洋をおし渡った。年老いた彼の師、偉大な地理学者トスカネッリは、この島が黄金と真珠と宝石で出来ていると、書簡で彼に教えなかったであろうか。家々の屋根や玄関口は黄金で出来ていると言わなかっただろうか。こんなことを聞いて、どうして、貪欲なジェノア人たるものが安閑たる眠りを貪っておられよう？　こうして彼はジパングを略奪すべく出発した。が、彼女を発見するにはいたらなかった。アメリカ大陸という障壁がかれらを阻んだのだ。それから五十年の後、彼女は別の冒険家、ポルトガル人フェラオ・メンデス・ピントによって発見される。ピントたちの乗った船は日本近海で座礁し、ドック入りした。彼らは自分たちの保有していた高価な商品売り、船倉うず高く黄金と絹製品を積み上げた。これらアラクレ者の海の狼たちは日本の豊かさ、優美さと文化に驚嘆した。賛嘆の念とともにかれらは、「誰ひとり彼地では手摺みで食事をしたりせず、二本の小さな木か象牙の棒を使う」と語るのをつねとした。当時のヨーロッパ人たちは手摺みで食事をしていたのである。

がつがつした山師どもが四方八方から駆けつけてきた。宗教上の商品を携えもち、宣教師たちもやってきた。これらの先駆けをなしたのは、温和な聖フランシスコ・ザビエルだったが、彼は余生を通じて、この新たな国土こそ自分の最大の心の慰めであった、と語っている。彼は、「日本人は・・・世界で最も有徳で、正直な民族である。かれらは善良で、狡猾でなく、あらゆる人間的徳のうえに名誉を置く」とさえ言ったのだ。



数年後には教会が建てられ、何千という日本人が洗礼を受け、民衆や貴族たちが新たな仏陀、すなわちキリストを礼拝するようになった。ヨーロッパ人たちはしかし、キリスト教といっしょに鉄砲、梅毒、タバコ、奴隷交易をもこの処女地にもたらした。西欧文明が根を下ろし広がり始めると、良心のかけらもない商人、フランクの海賊、女性売買業者、酔漢どもが登場した。何千という日本人がガリー船に積みこまれ、遠い国の市場で奴隷として売られた。さらにもっと始末におえないことが起こった。数が増えるにつれ日本のキリスト教徒たちは自民族の寛容さ・温和さを忘却し去り、迫害する側にまわった。仏教寺院が燃え落ちた。洗礼を受けようとしなない者は大鍋の中に投げこまれ煮られた・・・そしてこれは、一六八三年のある日—その日よ祝福あれ—おそるべき大量虐殺が起こり、我慢ができなくなった日本人たちが立ちあがり、日本の土壌をキリスト教徒とヨーロッパ人から清めるまで、続いたのだった。

わたしは船の舳先のところに凭れかかり、濃い緑色の波を分けつつ船首がスエズ運河に入っていくのを眺めていた。愛の冒険、その旅は、これからまだ一ヶ月以上先のことになるう。が、わたしの心のなかではすでに、日本の、四周の海にうちたかれ痩せ細った身体が、次第にかたちを整えつつあった。

白いシェフ帽をかぶった日本人のコック三人が、わたしの側で、爪先だち中腰になってひとつの花鉢をのぞきこんでいた。鉢にはまことに小さなシャクナゲが花を開いていた。かれらは息を殺し、じっとこれを凝視していた。ひとりがそっと指を延ばし、薔薇に似たその植物の花びらを、そして後には萼をひとつひとつ数えはじめた。それから、つっと手を引っ込め、一言なにか言った。すると他の二人は、まるで鉢を拝むかのように、お辞儀をするのだった。

愛情と沈黙と集中——わたしたちはすでに、どんなにあの、ポートサイドの恥知らずな金切り声、激烈だが薄っぺらなジュスチャーにほど遠いところに来ていることか。わたしは思いに耽った。スペイン人やポルトガル人が最初の使者としてやってきたとき、どんなに野蛮な印象をこれら寡黙な人々の魂に与えたことか、また港が閉鎖され、目も綾な伽藍の反りかえった大屋根をふたたび沈黙と平安が領するにいたったとき、どんなにかれらは安堵したかどうか、と。

二世紀間というものの、日本の港は白い野蛮人に対し閉ざされたままだった。が、一八五三年の夏のある朝、アメリカのペリー提督が日本世界に登場した。彼は黄金の箱に収めた最後通告を携えてき、アメリカ商船への開港を要求した。提督はその箱を、当時の日本国の支配者であったサムライに手渡し、来年ふたたびやって来るとき確たる返答をするよう言い残し去った。

日本では大騒動が巻き起こった。否！われらが聖なる土壌を、ふたたび野蛮人どもに汚させてはならない！祖先の霊たちは墓から立ち上がって叫んだ。しかし翌年、ペリー提督が軍艦を引き連れて戻ってき、大砲から二、三発の砲弾をぶっ放すにいたり、日本人は観念した。もはや逃れる術はない。これら白い悪魔どもとどうして戦えよう？かれらには鉄の船がある。かれらには大砲がある。かれらの船には悪魔の仕掛けがしてあり、帆もないのに風のなかを前進する。あらゆる邪悪な力はみな、かれらの側についている。もはや逃れる術はない。こうして港が開かれた。白人の眼に、こころを魅惑する絶美の奇観が展開されるようになったのは、そのとき以後のことである。春、爛漫と咲きほこる山々の桜。秋、千に色づき香る菊の花。奥ゆかしく小柄な女性。絹に扇に奇妙な寺院に仏像に絵画。思いもかけぬ喜びと優雅さに満ちあふれた世界。

人生に飽いた小心のピエール・ロティがやってき、この永遠なる処女地を、壊れやすい骨董品、魂はないが優雅

さに満ち満ちた世界に描いた。女は人形。男は小人。かれらの着物を剥いでみよ、後に何が残るか。何もなし。それから、ロマチックなラフカディオ・ハーンたちが大勢やつてき、こぞって日本人の魂について、抑制された激情、神秘的な微笑をほめそやし、永遠の田園詩のようなものに仕立てあげた。「日本人の心」とや？ そは「朝日に匂う山桜」なり、と。愛らしく、繊細で、寡黙な人々。笑いながら死んでいく男たち、忍従と沈黙を守る女たち……。偉大な著作家たちがこの国に目をとめた。で、今となつては、かれらの物の見方を離れてこの国を眺めることが困難になっている。やせ細って華奢なこの国の身体に、かれらは自分たちの想像力が紡ぎだした最もエキゾチックな花々で飾りたてられた一枚のキモノを纏わせたのだった。

そのキモノを少しばかりもちあげ、眺めてみよう。出発するときわたしは、二つの日本語「サクラ」と「ココロ」を知っていたにすぎない。が、旅の途次にある今、本当にすっかり日本と接触したいと思うのなら、わたしは、上の二つの言葉に付け加え、さらに第三の言葉を知らなければならないのではないか、と考える。日本語でその言葉をどう言うのか、わたしはまだ知らない。しかしギリシア語では「トロモス〔恐怖〕』と言う。

## 日本船の上にて

逆向きに開閉するドア。背の低い、黄色の、寡黙な水夫たち。手を清潔に保つため白手袋をつけている。純白の下地に黒々と書かれた、落木か戸か建築足場のような奇妙な字。ドアの陰、階段の下、張りわたされたロープの間、いたるところ、射るようにこちらを見る釣りあがった眼。ジャングルに踏みこんだような恐怖。鹿島丸、日本の船。人種の坩堝。デッキで円盤投げに興じ、バーでソーダ水を飲むイギリス人の男女。後にしてきた陸地のほうを静かに眺めている日本人。身体じゅうカメラや双眼鏡をぶら下げたドイツ人。フランス人女性。ロシア人。キリスト

と大英帝国という二つの目玉商品を売り歩くためインドに派遣されるイギリス人宣教師。絶えまなくブロークンなドイツ語を喋るポーランド人ヴァイオリニスト。乗船初日だというのに、わたしたちはもう彼の一切の秘密に通じてしまった。ヴァイオリンの学校を開くため東京に行くのだという。九年間生活を共にした忠実で献身的なガールフレンド、ステンカの秘密も彼は洗いざらいにしてしまう。ひと握りの写真により、わたしたちは彼女の体の秘密をことごとく知ってしまう。サロンからは蓄音機のがなりたてる凄まじい金切り声が聞こえてくる。籠の中に詰めこまれていた猫どもが一齐にとき放たれ、窓という窓から跳びだしてくるかのようだ。

わたしはデッキを散策し、忠実なわが旅の友パイプを吹かす。きれぎれな会話が流れてき、耳に入る。女、上海、音楽、キリスト、ムッソリーニ、セイロンで見られるという仏陀の歯についての断片的な話。絹のストッキングも露わに、フランス女が仰向けになり日を浴びている。騒音、混乱、カオス。君はまださまざまな顔を区別できない。君はまだ確たる意見をもてない。最初の一瞥、最初の言葉、最初の遭遇。誰もが自分に一番ふさわしい旅の伴侶、三十二日間という果てしない航海が無事終わるまで頼りにできる仲間を求めている。乗客を捉えているのはちよつとしたパニック。孤独というあの残酷な猛獣を前にしての脅え。

海は穏やかで粘っこい。砂漠は両側にある。荒れた沈黙の場所から噴きあがる灰色の煙霧。わずかに波うつ黄色の房。広漠たる砂漠を眺めるとき、古い願望が甦る。まっすぐ前方に、一度も後を振り返ることなく、昼も夜も歩き続けたいという切ない願望。かすかな陶酔、砂漠のなかで道を失いたいという強烈で不可解な願望。酒も女も、またどんな思想も、これほど致命的かつ甘美に、わたしの精神を衝き動かしたものはない。

わたしにはしかし砂漠で迷子になる勇氣はない。そこで、せめて旅の間ずっと沈黙を守りたいと願う。ピタゴラス的治療！聞いたり話したりした一切の言葉からわが身を清浄に保ち、内面世界にはびこる木蔭のように、冷

やかにして緑なす沈黙を繁茂させたいと願うのだ。だが、群居を好む人間心理は、君に沈黙を守らせてはくれまい。羊群のように人々は、頭を寄せ凭れたがる。沈黙への恐怖。活力を与えてくれるのは無駄口だけ。

紅海に入る。うだる暑さ。呼吸困難。女性は衣服を脱ぎ捨て、イギリス人は冷たいレモネードを飲み、日本人は扇をパタパタやっている。汗と腐敗のほのかで甘酸っぱい匂い。ポーランド人は話しつづけている。その声はけだるい。むかむかする。が、いつしか、みな、耳をそちに傾け聴いている。彼の先祖は巨漢の百姓で、王に仕えていた、と言う。ある日、王の乗る馬車の車軸が折れた。車軸を取り替えるため彼の先祖は車輪に指を突っ込んだ。お陰で馬車は前に進むことができた。指は食いちぎられてしまったが、王は彼の先祖を伯爵にした。

ドイツ人が舷側に身を乗りだし、イライラしたように紅海をみつめている。紅海って、えっ、全然赤くないじゃん？ 真っ青。どうして？ 彼がバルトを後にしたのは、熱帯地方の様々な不思議について書いた本を読んだからだ。口をパクリと開けた鯨、群をなして泳ぐイルカ、奇妙な海鳥。夜でも読書できるほど光り輝く海水。これらを見ようと、彼は舳先に身を乗り出したものだ。ところがどうだ！ ごく普通の鷗が数羽と、昼は青、夜は真っ黒の海水があるばかり。「で、桜の花はどうなんだろう？」と、ある夜、彼はわたしに尋ねた。もしかして桜の花も嘘っぱちじゃないか、紙のうえ、素敵なポスターの中でだけ咲いているんじゃないか、と心配になったのだ。わたしは彼をなだめた。いま時分は、とわたしは彼に言った、彼の地の日本では、絹のように柔らかな樹皮が枝々を包みはじめており、勢いよく樹液がのぼり、蕾が膨らんで、わたしたちが向こうに着くちょうどその頃合には、準備万端すべて整い、あらゆる桜という桜の樹々は、まったく観光用のポスターそっくりに、幹から天辺まで、聖なる花で埋めつくされていることだろう、と。

次第に混乱がおさまり、個人個人の目鼻立ちがはっきりしだし、かたちをなしていなかったものが固まりかかり、

最初の同質的なグループが出来はじめ、それぞれの習慣が見分けられるようになってくる。イギリス人たちはいまや、果てしない沈黙の時を、小さな柱にロープの輪を投げることで過ごしている。ほんの時折、その沈黙が、野蛮で言葉をなさぬ叫びで破られる。白髪のウィーン人舞踏家は、夫と合流すべくジャワに向かうところである。彼女のバスキーな声は、屋根のてっぺんの猫みたいに情熱的である。彼女はブービ、ウィーンの社会主義革命の期間に殺されたチヂレ毛の小さな犬について話す。おそろべき殺害、残虐にして血に飢えた二つの思想の衝突が、彼女にかかれば、死んだ犬のおセンチな小話になりさがってしまう。

日本人乗客たちは二つのグループに分かれる。一等および二等の乗客たちは、英語を話し、円盤投げをして遊んでいる。そして三等の乗客は、何時間も猫と戯れ、花鉢や海を眺め、二本の不思議なハシを使って米を食べている。ひとりのもの静かな日本の老人が、船尾に膝を組んで座り、じっと、後になっていく緑の航跡を眺めていた。わたしは、この老人と話をした。彼の英語にはひどい日本語なまりがある。しかし、彼の言うことをなんとか理解することはできた。彼はわたしに、ミカドの超人的な威厳について語った。「日露戦争のあいだ」と彼は言った、「ひとりの提督がミカドの前に泣きながら現れ、『陛下、おそろしい報せでございます。わが最大の甲鉄艦が撃沈されました。』と報告した。外では宮殿を取り巻いて人民が泣いていた。提督は震えた。が、ミカドは泰然自若として静かに答えた、『そう、撃沈されたな』と。そして他には何も。」

「数日後、提督が喜び勇んでミカドの前に駆けつけた、『陛下、素晴らしい報せでございます。ロシア艦隊が沈みましてございます!』。外では宮殿を取り巻き人民が欣喜雀躍し歓声を挙げていた。提督は得意満面であった。が、ミカドはやはり泰然自若、落ち着き払って答えた、『そう、沈んだな』と。そして他には何も。」

日本人は小さな輝く眼でわたしを見、しばらく無言でいた。それからふたたび海のほうを見やり、わたしの知ら

ない「フドウシン！」という日本語を呟いた。

「フドウシン？」とわたしは尋ねた、「その意味は何ですか」。

「喜びにあつても悲しみにあつても、心を不動に保ち、平然としてあること。これは生粋の日本語で、他の国語にはありません。メイド・イン・ジャパン。」

同じ日の夕刻、一羽の青黒い鳥がアフリカの山のほうからやってき、マストのまわりを飛びめぐり、「チウー、チウー！」と二、三回、わたしたちの頭の上を鳴きながら通り過ぎ、ふたたびアフリカのほうへ飛び去った。

このとき日本の老人とした会話、そして青い鳥こそ、船上で過ごした長い日々のうち、わたしの最大の喜びであつたものである。

## 東洋の港

花をつけたブーゲンビリア。言いようもない不潔さ。がなりあう声。喧嘩口論。黄色い火花を散らす目と目。タールの臭いのする帆船。魚と酸えた果実の臭い。早熟に膨らんだ胸をもつ恥知らずな娘たち。後にぞろぞろ付いてき、「えも言われぬ快楽」を約束する男の子、老人たち。どこへ行つても、むっとする汗の臭い。港全体がさかりのついた野獣のような臭いを発散している。歴史が始まって以来、東洋の港はこのようであつた。

この世に生まれ、たまたま、かかる港にめぐり会うことができたこと、そして強烈きわまる人間の異臭を嗅ぐことが出来たことを、神に感謝する。聞くことを許されるはずもなかった言葉を聞くことができ、東洋の禁断の木の実、それがいかにも甘美であることを——いやたんに甘美であるばかりではなく、聖なるものですらあることを——感じる事ができたのだから。

体じゅう―目、唇、指、足の爪先にいたるまで―べたべた塗りたくった、まんまるでいい匂いのする、果物そっくりの娘たちが、波止場に黙って座りこみ、停泊する船のほうを眺めている。クノッソス出土の粘土製婦人小像の腰のあたりには、磁気を帯びた鉄片が嵌めこまれていた。周知のように、これら東洋の女、永遠のセイレンたちも、この種の無比の磁石をもっていて、それで船舶を牽きつけるのだ。彼女らは波止場に座り、のんびりと反芻する雌牛よろしく、メロンの種やピーナッツ、あるいは香りのいいマスティカを、モグモグクチャクチャやっている。彼女たちは知っている、水夫を呼びこむのに体を動かしたり叫んだりハンカチを振ったりする必要はまったくないということ。不動な磁石のまわりに、船はおのずと吸い寄せられるのだ。

バルセロナ、マルセーユ、ナポリ、コンスタンチノーブル、ジャワ、アレクサンドリア、テュニス、アルジェ―何世紀にもわたり港の女、太陽に焼かれたセイレンたちは、地中海の緑に座り、水夫たちに秋波を送りつづけた。だがここでは、魅了されたのは水夫だけではない。そしてついにはすべてのものが、ひとを魅惑する体臭を帯びるにいたったのだ。ここではあらゆるもの―果実、人間、観念、道徳にいたるまで―が、同じ土壌、生温かい水、幾たびも航海した挙句ここに投錨したさまざまな帆船の色や、酒と女から遠ざかり野性に帰った水夫たちの、塩風に吹かれ黒ずんだ皮膚の色から出来ているのである。

バナナ、メロン、ナツメヤシ、イナゴマメ、シトロソ。これらの木陰にその芳香を呼吸して育った文明は、当然、深い神秘的な絆によってこれらの植物に結ばれている。果実も人間も観念も道徳も、すべてが兄弟のように似かよっているのだ。もし君が、芳香と異臭に耐え、ここでの生活に持ちこたえようと思うのなら、心を大きく開き、精神を鍛えねばなるまい。君の衝動を厳しく律せよ。さもないと、この東洋の港の光景は、君には耐えがたく厭わしいもの、あるいは、致命的魅惑でもって君を唆ってやまないものとなろう。狭量で純粋で冷厳で道徳的な魂は、ここ



では何も感じられまい。東洋の港の「徳」の基準は違ふのだ。そして「罪」の許容範囲もずっと緩やかなのだ。これらの港にあって、突如として君は、名状すべからざる苦い思いとともに、「徳」が人間本性に反するものであることを実感するのである。

## コロンボ

すでに紅海を過ぎ、船はインド洋に出ている。来る日も来る日も陸地を見ない。どんよりよんだ倦怠の雲がマストのあたりに降りてき、濃い靄のように甲板を這い、居座っている。耐えがたい暑さ、窒息寸前。船底で働く火夫を思い、やっと息をつく。ときどきイルカが、まるい胴体をガラッと光らせる。ときには、粘る海面を、飛魚が矢のように跳ぶこともある。乗客はみな暑さで体力を消耗し尽くす。青菜に塩の態でもものの陰に入り、氣息えんえんとしている。鼻孔に漂う没落の気配。

二人のインド人回教徒だけが、甲板にあって品位と生活のリズムを保っている。毎朝、日の昇るとき、そして毎夕、日の沈むとき、小さなマットに膝まづき、かれらは祈る。かれらの宗教は、かれらに、太陽そのもののリズムを与えているのだ。かれらの魂は、大いなる星の歩みに従うヒマワリのような。たとえ船上にあって他の者が朽ち果てようと、これら信心深い回教徒だけは、腐敗することなくもち堪えるであろう。

このようにして単調に、没落の気配も濃厚に、日々と夜々とが過ぎていった。そして、ある晩、すべての顔がぱつと明るくなった。明日の明け方、われわれはセイロンの有名な港、コロンボに到着するというのだ。

紫紅色の雲のなかの太陽。緩慢に、滲むようにひろがる光。われわれは港のなかへ、眠る女主人が目を覚ますのを恐れるかに、ゆっくり、滑るように入っていく。あけの明星がまだ頭上に輝いていて、いままさに彼女の胸に

滴り落ちむとする雫に見えた。最初の朝の光がミナレットの天辺にかかり、円屋根のいくつかが薔薇色に染まる。鷗が目覚め、鳥の一群が頭上を飛んでいった。町へと、舳先はするすると音もなく近づいていく。甘美な時、神秘的でエロチックな瞬間。

港の奥の暗いほうから、ゴンドラに似た細長い小舟が、棺のような長い箱を載せ、列をなしてやってくる。小舟のそれぞれ、箱の上には、チョコレート色の半裸の男たちが三人真っ直ぐに立ち、白い帯を締め、長いオールをゆっくり操っている。

太陽が昇った。家々が笑いかけた。人声、言い争いの声が聞こえた。町が目を覚めたのだ。陸地に跳び降り、海岸通りをあちこちする。扇のように眼前に開いた通りをまえに行くべき場所を捜すのを喜ぶ。「壮麗な陳列棚」なるイギリス人向けのみすぼらしい区画の背後に、バナナの葉の茂りを見分け、土地のひとびとが発散する胡椒のような臭いを嗅ぐ。

リクサ、軽快な二輪車に乗る。人間―馬が牽き、大股で走る。ヨーロッパ区域からの脱出。すでに背後だ。花を点けた草木。モクレン、フジ、ジャスミン、パピルス・・・鼻、目、耳を全開させる。心臓は胸壁のなか、ブーゲンビリアのように花開き充満する。

白人、落ち着きなく悪賢い連中からの逃亡。ここでは体はチョコレート色。胸、太腿、足は裸。麝香の匂いのする女たち。腰を覆う緑、黄色、オレンジの布が輝く。その魂は太陽に焼かれた胸、その奥の涼しげな内蔵の洞に膝を組んで座り、この世を眺めている。

通りの中央の小さな祭壇。そこに座る小さな、剽軽な、可愛い表情をした仏陀。通行人を眺め、微笑している。黄色いシャツを着た痩せた男が、その前にぬかづき親しげに見上げている。足首に白い環をつけた少女が段に上が

り、仏陀の小さな脚の傍に一握りの赤い花を供えている。祭壇の向側、椰子の樹の下には娘たちが寝ころがり、欠伸をしたり、ビンロウ樹の実を噛んだりしている。濃いオレンジの唇。

温かい人情。真つ黒な眼。赤く塗った長い爪。すんなりと調和のとれた足取り。狭く薄暗い店のなかで輝く大きな白い歯。小さなセイロン人が一人わたしにひつついてくる。その長くふわふわした髪は、風の動きにつれ臭う。いささか英語を話す。チョコレート色した顔が喜びと汗で光っている。

「ルビー、サファイア、トルコ石、買イタイカ？」

この島が貴重な宝石を産出することは知っていた。大好きではあるが、わたしには買えない。が、それら宝石の名前の響きを耳にするのもよい。そこで、何度も何度もくりかえし、素早く、大声で、母音を利かせて言ってもらう。するとそれらは、受け止めようとして差し出したわたしの掌から溢れ、敷石の上に落ち、パチパチと音を立てるのだった。音の響きを喜び得心したとき、わたしは首を振り、高価な宝石はいらないのだということを示す。すると彼は絹製品をもちだした。そして次には真珠を。それから女の子を。それから彼は、いったいこの男は何に關心を持つのだろうか、占うようにじっくりわたしの様子を窺った。突如、彼の目が輝いた。

「仏陀ノ寺院イクカ？」

わたしは破顔した。手を広げ、力をこめて彼の肩を叩いた。

「当たり前！」

寺院の入口まできた。案内人の掌のなかに一枚の銀貨を落とす。彼は去った。わたしはひとり小さな寺院に入っていた。涼しい。わたしの眼は穏やかになり、額は静謐に満たされる。薄明かりのなか、わたしは、寺院の壁を埋め尽くすたくさんの像—ブロンズの神像、荒々しい精霊、緑の顔、赤い口、やせこけた頬、を見た。そうだ、こ

れらこそ人間の病い、悩みの姿なのだ。奥の、高いところ、白い幕の後ろ側に、魅惑的な微笑をたたえ、仏陀が脚を組んで座っていた。

仏陀の頭のところに、十個ばかりの、色とりどりの小さな紙製の回転器が取りつけられていた。聖なる回転礼拝器。入口の扉のほうから微風が吹いた。するとそれは、人間の欲望のあれやこれやを紡ぎつつ、くるりくるりと回転するのだった。

## シンガポール

ここでは人間性が違う。大地の顔が変わったのだ。われらが族はついに底をついたとみえる。人々は違ったふうに笑い、話し、食べ、叫び、踊る。これらの人々はわれわれのとは違う動物を先祖として、別の粘土で出来ている。一群のカヌーがわれわれを港で取り囲む。それぞれのカヌーには、張りでた頬骨、まん丸で小さい目の褐色のマレー人がひとり乗り、櫂を手に、右、左と、驚くべき優雅さで、矢のように尖った丸木船を操り漕いでいる。ゴム毬を櫂の背で打つテニスのような競技の真っ最中なのだ。競技をしながらからは笑い、われわれを冷やかす。ピンク色に上気したイギリス人女二、三人が、舷側に身を乗りだし、手を叩きながら見物していた。

陸地にあがり見物しよう！アスファルト敷の広い通り。何千という小さな店。密集する黄色い肉体。家々と下水の耐えがたい臭気。どの臭いが人間のでどれが下水からのものかを識別するには、鍛練した鼻が要る。エキゾチックな果実。泥。汚物のなかを転げまわって遊ぶ子供たち。黙りこくって真剣な表情。腕白の儒家。そしてあちこち、汚物のうえのほうには、丈たかい、藤のような房状の赤い花を点けた緑の木。

黒いパジャマを着て、光る黒髪を編み、背に長く垂らした女たち、節目のない黄色の木に刻まれた顔。年とった

女たちは、腫れた雌山羊のそれのような、曲がって短い足をひきずりひきずり歩いている。ところが他の女たちは、しなやかに、断固として、大きな裸足で石を蹴とばしつつ、男のように歩いている。

おおいに印象的なのは、蟻集する蟻のような人混みである。道という道は、河のように流れる群衆であふれんばかりである。思い出されるのは、村々を裸にしつつ急流の勢いで行進する、アフリカのあの盲目の蟻である。ひとがもしこの流れに落ち込もうものなら、ほんの数分で、骨だけになってしまふ。白人がひとり流れのなかに落ちこんだ場合、同じことがここでも起こるだろう。

いまひとつ印象的なのは、ひとびとの眼である。どれも火と燃え、知性的である。だが同時に、それは白人への激しい憎悪に満ちている。支那街を歩いていて、ふと後ろを振りかえり見るとき、しばしば君は、じっと君を見据える何千という冷たい眼に気づき、ぞっとすることだろう。

この憎しみを忘れられるなら、漢字の標識に満ちた通りは、大いに愉快である。漢字はきわめて表現豊かである。その組立は直観的に了解可能である。だから、それらの言おうとしている事柄を理解するのに、意味を知る必要はない。精神と文字は合致する。色彩豊かな漢字のつくりだす調和を楽しみつつ散歩する。黒地に白文字。緑に金。朱色に黒。色彩は東洋ではきわめて温かく快適であって、視覚的意味だけでなく、聞いたり味わったり触ったり嗅いだりできる意味ももっているのだ。

薄明が、灰のようにたちこめはじめた。細い緑の新月が、天空にかかった。椰子の群落の後、その葉陰から葉陰へと、宵の明星が移っていくのをわたしは見た。広場全体が藁屋根のテント、露店の食べ物屋でいっぱいになる。男や女が膝を組んで座り、食事をしている。米飯のはいった碗をもち、二本の箸を使って食べ物をはさみ、奇術師みたいな素早い手付きで、口のなかに放りこんでいる。

—125—

類の肉体のうえには、怒ったコブラのように平つたい、おそるべき顔、マスクが載っていた。じっと動かない、オレンジ色の唇。釣りあがって、これまた動かない眼が、蛇そっくりの冷酷残忍な視線をこちらに向ける。

光を浴びフロアーで踊る人々。ブロンズのイギリス人男性が吼える。眼が霞んでいる。黄色の女どもが彼らの血を吸いつづけている。夜が更けるにつれ、女どもはますます生気を帯び、男どもは頹落していく。明け方ころにはすべての白人種が床にころがり、黄色人種の女だけが首をもたげ、血に飽いた吸血鬼のように、唇を舐めているとだろう。

太陽はすでに昇った。疲労。解放感、それと同時に嫌悪感。郷愁と恐怖のおもいこもごもに失楽の園を回想するような、阿片を呑んだ後の、ないしは二日酔いにも似て濃密に沈澱する、索漠として砂を噛む思い。この町は、下水の臭いと同時にジャスミンの香りがする。この果実は、眩暈を起こさせると同時に馥郁としている。この女は、魅惑的であると同時に死の気配に満ちている。同様にこの楽園は、精神を幻惑すると同時に墮落させる。

これぞまさに、好奇心と自尊心に満たされて地上のいかなる誘惑も見逃すまいとし、しかも同時に、墮落するとは欲しない魂に対して、セイレンがなすところである、とわたしは思う。人間が、これに対処すべく編み出した三つのやり方―肉体と魂をセイレンに譲り渡し腐敗するか、誘惑を前に微動だにせず聖人となるか、それとも、オデュッセウスのやり方で窮地を脱するか―のうち、最善なのはやはり、最後のものである。

## 著者カザンツァキスについて

カザンツァキスといえば、わが国ではわずかに、アンソニー・クイン主演の映画「ギリシア人ゾルバ」(邦題『その男ゾルバ』)や、しばらく前に映画化され欧米で一大センセーションを引き起こした「キリスト最後の誘惑」(邦題『最後の誘惑』)の原作者として知られているくらいだと思うが、彼が現代世界文学に屹立する巨匠であったことは疑いない。少なくとも、アルベルト・シュバイツァー、トマス・マン、アルベール・カミュは、そのように評価した。彼の日本旅行記の意義について若干述べるにあたり、まず、カザンツァキスの生涯について簡単に紹介しておきたい。

ニコス・カザンツァキスは、一八八三年二月一八日、クレタ島のイラクリオンに生まれた。彼の度重なる旅行、とりわけ晩年二十年間における、ほとんど自己追放とも言える国外での生活にもかかわらず、クレタは、終生、彼の精神的故郷でありつづけた。自分がクレタの百姓の出であることを彼は誇りとした。『自由か死か』の登場人物カピタン・ミカリスにおいて理想化された彼の父親は、店主で農夫だった。カザンツァキスは、この父親を尊敬すると同時に恐れた。そして、敬虔でやさしい母親を極端なまでに愛した。カザンツァキスには二人の姉妹、それに彼がまだ幼児のころ亡くなったひとりの兄があった。

彼は郷里の学校に入ったが、一八九七年のクレタの反乱の間、クレタを離れた。多くのクレタ人は、家族をキラデス諸島に疎開させたが、カザンツァキス一家はナクソス島に難を避けた。ここで少年カザンツァキスは、二年



間（一八九七～九九年）、フランシスコ会系の聖十字架フランス校に入り、フランス語、ラテン語、イタリア語を学び、一九世紀ヨーロッパ文学、とりわけフランス文学に親しんだ。ギムナジウムの最後の二年間には、英語とドイツ語を独学する。教師たちは、この子供が、将来、偉大な人間になるだろうことを予感した。やがて一九〇二年にアテネ大学法学部に進学し、一九〇六年一二月に優秀な成績を修めて卒業した。

アテネ大学在学中の一九〇五年に、アクリタスというペンネームで、アテネ屈指の新聞「アクロポリス」のコラムニストになった。そのとき、彼の終生のアイドルとなった偉大なナシヨナリスト、民衆派の指導者イオン・ドラグーミス（～一九二〇年）に出会った。この頃、「われらが世紀の病い」と題する最初の論文を執筆し、カルマ・ニルヴァアーメというペンネームで劇作品『蛇と百合』を出版している。そして一九〇七年には、最初の三幕ものの演劇脚本『夜が明ける』を執筆し、賞を得た。

一九〇七年、イタリアへの最初の旅をする。そのとき、ガール・フレンドでアテネ大学文学部の学生だったガラテア・アレクシウー（一八八六～一九六二年）が同行した。父親の強い反対にもかかわらず、一九一一年に彼女と結婚した。そして、一九二四年まで彼女と生活した。一九二六年、離婚。

一九〇七～一九〇九年、パリに留学する。哲学者アンリ・ベルクソンの下での勉強。ベルクソンの「エラン・ヴィタール」の思想がカザンツァキスに与えた影響は見逃せない。この留学時代に、あるパリの女の子から、風貌がニーチェに似ていることを指摘された。このことが、ニーチェ哲学の研究のきっかけとなった。一九〇八年、「フリードリッヒ・ニーチェと権力の哲学」と題する九三ページの博士論文を執筆。アテネ大学法学部はこれを受理した（一九〇九年、イラクリオンで出版）。パリで、アテネの新聞や雑誌の通信員として働く間に、哲学論文「科学の没落」（一九〇九）およびウイリアム・ジェイムズの理論にヒントを得たプラグマチズムに関するフランス語の哲

学論文を執筆した。

一九〇九～一九一〇年に、民衆派の文芸誌『ヌーマス』に、ペトロス・プシロレティスというペンネームで最初の小説「破産した魂」を連載した。翌年、ギリシアのフォークソング「アルタ橋」にヒントを得て、ニーチェ的ドラマ「犠牲」を執筆、賞を得た。

第一次バルカン戦争（一九一二～一九一三年）勃発に際し、志願兵となった。首相（エレウセリオス・ヴェニゼロス）を補佐する秘書役がその仕事となった。一九一一年から一九一五年にかけて多数の翻訳をする。ウィリアム・ジェイムズ、ニーチェ、エッカーマン、メーテルリンク、ダーウイン、ベルクソン等の主著、さらにプラトン対話篇を翻訳した。また、妻の名前で、学校の読本シリーズの執筆に携わった。

一九一四年、そして一九一五年には、親友の詩人アンゲロス・シケリアノス（一八八四～一九五一年）といっしょに、古代および近代ギリシアの聖所をシステムティックに巡礼した。その二年後、G・ゾルバといっしょに、マニ近郊の炭鉱の発掘を試み、失敗する。このときの経験を元にして執筆されたのが、小説『ギリシア人ゾルバ』である。この後、二年間、チューリッヒに滞在した。

一九一九年五月から一九二〇年一月一日まで、社会福祉局の総監督として、コーカサスからのギリシア難民の本国送還という難事業に従事し、成功する。『ギリシア的情熱』で扱った難民問題を、彼はこのときはじめて意識するに至った。一九二一年、ウィーンで仏教の集中的研究に携わり、悲劇『仏陀』の執筆を開始する。（すでに、『オデュッセウス』、『キリスト』、『ニケフォロス・フォカス』は執筆されていた。仏陀は、彼の魂には異質であったが、生涯を通じて、お気に入りの予言者、人間の導き手の一人でありつづけた。）

一九二二年から一九二四年までの期間は、カザンツァキスの生涯の転機となった。熱烈な民族主義者から社会主

義者への転向。当時のドイツの現状と小アジアにおけるギリシアの敗退、その後のギリシアの困窮、友人たちの影響の反映か。三年間をベルリンで過ごす、その間、若いポーランド人やドイツのユダヤ人社会主義者や知識人からなる一サークルの指導者の位置にあった。このグループの若い女性たちにとって彼は、見神論者たちにとってのクリシュナムルティに相当する者であった。この期間に、カザンツァキスはメタコミニズムについての理論（コミニズムを越える社会の構想）を展開した。スターリン個人については、民衆と結ばれた予言者として評価したが、彼はスターリンの教説やマルクス主義の哲学一般を極端に嫌った。マルクス主義は人間のもつ形而上学的、精神的欲求を無視するものだと考えた。コミニストの官僚主義、数や統計を至上のものとして崇めるその態度は、彼に生理的嫌悪感を催させた。

メタコミニズム理論、また、献身的創造活動のみが「神を救う」という彼の信念は、小説『神の救済者』に表現された。これは、もともと、一九二七年にギリシアの『アナゲンニシ』誌に発表されたものだが、一九四五年にその改定版が出た。カザンツァキスの世界観は、巨大な叙事詩『オデュッセイア：現代の結末』に凝縮している。この三万三千三百三十三行からなる長い叙事詩（十七音節のイャンボス形式による韻律詩）は、その決定版（一九二五年冬—一九三八年一二月）にいたるまで七版を重ねた。『オデュッセイア』の仕事に没頭した一三年間に、彼はまたフランス語による二冊の小説、四冊の旅行記、多数の悲劇、二一の長詩、四篇の映画の脚本、子供のためのおよそ四〇篇の読本、エレウセルダキスの百科事典の二、三百ほどの項目、新聞や雑誌への多数の論説文を執筆している。この期間に彼はまた、ダンテの『神曲』、ゲーテの『ファウスト』を翻訳した。

一九四五年のギリシア解放後、しばらく政治に携わり、ソフーリスの自由主義政権の無任所大臣を務めた。一九四五年一月一日、仕事の完成を終始励まし助けた忠実な友、協同者、サモスのエレニーと結婚する。彼女の祖

父アフェントウリスは、十九世紀ギリシアの最も輝かしい科学者、知識人のひとりであった。

一九四六年六月二日、イギリス文化協会の招きにより英国に向かつて旅立つ。そして、ついにギリシアに帰らなかった。十一ヶ月間（一九四七年五月一日～一九四八年三月二五日）、ユネスコ翻訳局のディレクターを務めた。そして一九四八年六月に、フランスのリヴィエラの、かつての古代ギリシア都市アンティベに、ついの住処を定める。ここで彼は残された余生を著作活動に打ち込む。彼の名前を全世界に知らしめた有名な小説『ギリシア的情熱』、『自由か死か』、『キリスト最後の誘惑』、『聖フランシスコ』や叙情的な自伝『グレコへの報告』は、この地のマノリータ村で執筆された。

一九五三年、重病に陥る。晩年、彼は、白血病に冒されていた。中国および日本への旅からの帰途、ドイツのフライブルク大学でハイルマイヤー教授の手術を受けたが、甲斐なく、一九五七年一〇月二六日死亡した。

カザンツァキスの旅行書。それは、カザンツァキスの名前をギリシアの一般大衆に知らしめたものだった。彼の悲劇、彼の『オデュッセイア』、彼の『神の救済者』は、ギリシアの一般大衆を牽きつけなかったが、彼の旅行書は、その臨場感あふれる叙述、人物や場所や出来事の目に見えるような再現、深い思想のコンパクトな表現、忘れがたい警句等々によって、一般大衆の愛読書となった。これらの書物は、自分が接触したひとびとを理解しようとする彼の努力、また、それらのひとびとの行動パターンや生活様式の起源、その発展を、自分の研究が及ぶかぎり、歴史的文脈のなかで理解しようとする誠実な姿勢によって貫かれている。

カザンツァキスは、旅のなかで、民族、国家、宗教、文明の相違にもかかわらず、人間精神をひとつに結びあわせる見えない絆を見出そうと努めた。「人間精神の最大の喜びのひとつは、対立しあう意見の双方に耳を傾け、そ

これらの相対的な価値を認め、狂信的に反目しあうそれらの思想のなかからひとつの完全な総合を見出そうと努力することだ」と彼は語っている。カザンツァキスは、多様な社会の背後にあってこれを包括している人間存在の類似性を探そうとしたのである。

最初の旅行書は、『旅しつ—スペイン、イタリア、エジプト、シナイ山』というタイトルで一九二七年にエジプトのアレクサンドリアにおいて出版された。この書物にはムッソリーニとの会見記およびそれ以前に彼が訪問した地中海諸国の印象記が含まれている。この書物—ただしスペイン篇が除かれ、エルサレム、キプロスおよびペロポネソスについての章が加わったもの—は、一九六一年にアテネにおいて出版された。

ソビエトへの四回の旅は『わたしがロシアで見たもの』（一九二八年）、二巻本の『ロシア文学の歴史』（一九三〇年）およびフランス語の小説『トダーラバ』（一九三二年）に結晶した。『わたしがロシアで見たもの』は、後に『旅しつ—ロシア』というタイトルで再版された。一九三七年には『旅しつ—スペイン』が出版された。

ギリシアにおける彼の旅行記のうち、いちばんポピュラーなのは、一九三八年に初版が出た『旅しつ—日本／支那』である。これは一九三五年における極東への旅の印象記である（一九三五年二月二日～五月六日）。この書物に含まれている叙述のあるものは、若干の変更を加えたうえで、一九三七年ころ書かれたフランス語の小説『石庭』に採り入れられた。一九五八年の『日本／支那』第四版には、カザンツァキスの手になる最後の文章、また、『二十年の後に』というタイトルで支那について執筆を計画していた書物についての彼の注釈が含まれている。また、今回の訳出に際して用いた第六版には、カザンツァキスの二度目の妻エレニーによるエピロゴス、一九六一年版への追記（エピメトロ）が収録されている。そのなかには、神道の儀礼や大阪の人形劇（＝浄瑠璃）についての印象深い記述がある。なお、彼女は、重い心臓病にかかってはいるが、未だ存命だと、アテネの友人から聞いて

いる。

注

この解説を書くにあたって、Nikos Kazantzakis, Japan-China, translated from the Greek by George C. Pappageotes, Berkeley, 1982を利用させていただいた。